

競技会レポート

1. 同立戦

2年生 川 治 賢 祐

2009年8月22日より開催された第33回同立戦について、私は、二部での出場だったので、その視点から後輩へのアドバイスの内容として書くことにする。

まず、同立戦のための練習を8月の福井合宿で行った。この合宿では、飛行機曳航の発数が少なく自信が無かったため、また同立戦で採点される課目を意識して練習をしたことが無かったので多くの練習をしようと思って参加した。

この合宿までに木曾川滑空場でソロに3発出ていたので、基本操作の基礎はできていたと思う。飛行機曳航中の操作方法も一回生のころとは違い、どれくらいの操作をすればどれくらいの位置に移動するかや、曳航中にも他の事を少し考えられるようになるなど、少しだけ良くなっていた。しかしやはり、完璧には程遠い曳航操作で、注意を多数受けた。福井空港では離脱高度が高いので、8の字、初期失速、完全失速3回、旋回失速2回、急旋回などを一回のフライトで練習することが出来た。そして、この合宿の最終日に同立戦二部競技への出場を許可されることになった。

この8月福井合宿は同立戦前の最終合宿となる。木曾川での練習はおろそかにしないようにしておくべきである。

同立戦二部競技は、11項目が評価される。(曳航占位、直線滑空と旋回、8の字旋回、180°蛇行、ノーマルストール、急旋回またはターニングストール、場周飛行、着陸、計画力・判断力、対空警戒、指定地)指定地以外は各10点を最高とし、指定地はショートの場合が-10点でロングの場合が-5点となり合計100点満点で採点される。また2回の競技フライトを別機体で別採点員と同乗、採点されることで二部競技の順位を決める。特に

木曾川とは違い飛行機曳航中の対空警戒と速度管理とポジション管理は忘れがちになると、やり直すことができないので注意。他の空中操作は木曾川で練習している何時も通りで良い。もし課目でミスがあっても、最後に高度が余ると、そこでやり直しを求めると良いと思う。また、緊張して言葉が出なかったり、左右逆に言ったりがあるかも知れないが、それよりも安全で確実な操作ができていれば問題はないと思う。あと、風を考えての課目の組み立ても大事である。部員皆で相談し、地上で考えてフライトすることを徹底していれば大丈夫だと思う。今回の同立戦ではそれを確実に実行し、先に飛んだ選手のフライトを見て、意見を聞くなどをした。

最終日の表彰式で二部競技優勝を聞き、それまでの負けたらどうしようかとかいう気分が飛んでいき、「やった〜」という感動で胸があふれた。これまでやってきたことが報われたようで、本当にうれしかった。競技会で勝つ喜びというのを味わえたのはこの大会からの最大の収穫であった。

さて、部員はこの同立戦が初めての競技会への参加ということが多くと思うが、出来るだけ多くの部員に競技会へ参加して欲しいと思う。なぜなら、競技会へ出ることによって自分のフライトへの態度を変えることができるようになるからである。操作の正確さなどが見られ、評価される。競技会に出ずに自分だけで評価していたら、甘い評価しかせずには技量の向上は望めない。

訓練や学科は今はまだ楽しくないかもしれないが、良い成績を残せたときの達成感は格別である。ぜひ、競技会に参加するように。

2. 新人戦

2年生 田 渕 雄 亮

「は!?んなもん親指縛って固めてたらなんとかなるんちゃうん!?」

こんな予想外のことから始まった新人戦です。集合日、共に出場するはずだった西村が、数日前の交通事故での負傷のため参加不能となりました。一緒に R/W にいた他大学の選手からは、「あ～あ…同志社きついなあ…」と言われ、「ハンデには丁度いいし!」と返していたものの内心ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ! と思っていました。個人の力では上位に食い込むのは苦しいが団体ならなんとかなるかもと考えていたし大会に備え二人で情報の共有も行っていたのでこの報告は正直痛いものでした。

とはいっても怪我は仕方ないし、実際ヤバイと思ってたのは30秒ほどですぐに川治に電話したところ、地獄に仏、幸い川治はすぐに来てくれたのでとりあえず団体戦に参加可能となり次の日からの競技に挑むこととなりました。

さて競技が始まり、まず感じたことそれは R/W 人口多い! ということでした。最近の合宿では多くて二十数人、少なければ十人ほどということもあるのですが、新人戦では、少なくとも45人はいたと思います。初日こそ各支部間での交流は少なかったものの、3日もすれば打ち解け始め、昼休みは防衛大によるホフク前進講座、早稲田の独特な索付けのやり方など、いつもとは違う雰囲気の木曽川を楽しんでいました。

しかし競技会の雰囲気とは裏腹に、結果は散々でした…最終結果は個人8位、団体4位と他の人から見れば良くもなく、悪くもなくといったものかもしれませんが、個人的には満足できるものでは到底ありません。団体4位でしたがこれは川治

の健闘があったもの、逆に言えば彼が頑張ってくれたにもかかわらず入賞を逃したのはやはり自分の責任だと思います。

なぜ、このようになったのか…この時期、少し人に頼りすぎていたところがありました。新人戦では、西村は最近ライセンスもとったし彼の足引っ張らない程度にやればなんとかなるだろうと、少し前の同立戦では、共にI部競技に出る先輩に教えてもらえばいいかなど、すごく甘えていたことが多かったです。その結果が新人戦は上記のようになり、同立戦は出場選手で唯一得点なし(II部選手の得点は1/10され総合得点に加算されています)でした。2度の大会、そしてこの間に参加した外人合宿を通じて自分の甘さをもう一度自覚してこれからの大会、部活で今度は自分がまわりに良い影響を与えられるように、有言不行(こんな四字熟語はありません。不言実行の反対だと思ってください)で頑張っていきます。

最後に多くの御協力本当にありがとうございました。学連の教官、事務局の方々、クルー参加はさることながら、各フライト毎の点数が発表され、それを確認するとやっぱりなあと感じ、悔んでいることもあった中、他の部員からの励ましメッセージ、ブログに対する返事、コメント、宿舎への差し入れにはすごく元気付けられました。木曽川に居るのは選手だけかもしれませんがやっぱり大学の部活は応援してくれる人もいてナンボ、団体戦なんだなあと改めて感じました。少し自分の反省文で暗い文章になったかもしれませんが2年生にとって大会自体は本当に楽しいものでこの先も絶対参加してほしいものだと思います。是非普段とは違う木曽川を味わってみてください。

3. 関関同立戦

4. 東海・関西グライダー競技会

3年生 竹山 翔太

【関関同立戦】

東海関西競技会前に開催される関関同立戦は東海関西エントリー選手にとっては日程的に厳しいものの全国大会への出場権を勝ち取ることを考えれば絶好の調整期間になる。もちろん大会なので「勝ちに行く」のが当たり前だが、大会が始まる前から人数的に関西大学とは圧倒的な差を感じた。出場資格を満たしている人は同志社の方が多いはずなのに関西大学は「大会なので全員参加」で10人、対して同志社は「学業優先、希望者のみ出場」で5人。これは大問題だと思うので来年は改善する必要がある。

しかし、主な選手陣は夏の滝川合宿、同立戦の優勝、そして入江姉さんを中心に話し合いを重ねてチームとしては手ごたえを感じていた。

今回同志社にとって最も強力な武器となったのは入江さんと僕の2人エースの存在だったと思う。2008年度の全国大会を経験して悔しい思いこそしたが、それをバネにして夏にはそれぞれのフライトスタイルを完成させた。お互い良い気象条件が出ていなくても粘れるし、条件が出たら必ず周回できる、しかも速く。だから入江さんが飛んでいる時には次は僕に良い形で回ってくると信じていることが出来て、精神的にも余裕を持つことが出来たので、僕も得点できたという形がいくつかあった。

DAY 1

条件は渋め。しかしこういう時こそ Ka6E の力を見せることができる。10分を超えないフライトが続く中で僕のフライト。上空は何もなく、場周しようかと思った時に 220m で +1 のサーマルがあった。縦に長いサーマルで、いわゆる土手サーマルのようだ。僕が飛ぶ前のフライトでも場

周前に急バンクで回って諦めて場周しているという形があり気になっていたが、こういうサーマルはずっと旋回していても外すだけなので土手沿いを行ったり来たりして少しずつ高度を獲得していた。すると後から飛んだ関大23が同高度に。場周経路で回っているだけに気を使って場周。こういう場面で冷静に場所を譲る気持ちの余裕はこれまで無かったので成長したのかなと感じた。

DAY 2

1日中バッタフライト。

DAY 3

午後から訓練基準を超える風のため撤収に。入江さんが旋回点に向かう途中だったのに…。

DAY 4

条件爆発！1番目に入江さんが周回。次に僕の番のときにはピークに達していた。離脱してすぐにサーマルにヒットし上昇していく。700mまで上がった時に浮いている機体全ての位置と高度からコースさえ上手く選んだらワングライドで周回できると判断。中には1200mまで上がっている選手もいたがさっさと追い抜き簡単楽々15分で周回達成した。今季でもベストなフライトだった。また他大学には減点等が目立ったが同志社は唯一全員ノーミス。しかし、同志社は2名周回に対し関大は減点等もあったが3人が周回。元々選手が少ない同志社にとっては今回の気象条件のような時に次々に選手を送り出せず、悔しい思いをした。

DAY 5～6

何もなし

DAY 7

朝から逆転層があり滞空点のみを争う条件だと思っただが徐々に日射が。一瞬のチャンスをもにするために文化センターの東側 2 km 以内でサーマルを探す。すると野焼き+トラクターが動いている田んぼを発見。+0.5m/s で上昇してゆき 540m まで上がるがそれよりは上がらない。

他大学はさっきまで複座しか使っていなかった

のに急に単座に変更。近寄ってくる機体に対しては自分のポジションを取られないように無線攻撃して撃墜する。30分粘ったものの野焼きの火も消えたので場周する。

結果は個人では 1、2 位を独占したものの団体は 2 位。来年こそは団体で優勝をしたいと思いません。

【東海・関西競技会】

去年の東海関西、入江さんと僕にとっては奇跡の 5 位入賞だったが今年も奇跡での入賞は許されない。全国大会での悔しさもあり夏は必死になって飛び続けた。北海道滝川合宿、同立戦での優勝、関関同立戦での上位独占、そして関関同立戦の項で前述した通りのチームの仕上がり状況で迎えた東海・関西競技会であった。

DAY 1

バツ日和、日射は少なからずあるものの地上にはサーマルを発生させるモノがない。同志社チームも何回か飛んでみるが得点出来ない状況が続いていた。とりあえず、上空の様子をもう一度見てこようと思って出発。離脱して木曾川の景色を堪能しているとランウェイの南西 1 km の地点で野焼きをしているのを発見。上空に到達すると +0.5 ほどのサーマルがあったがまとまっていなかったのでコアを攻めるのではなくコアの外周を回るようにして高度を獲得していった。ちょうどそのとき地上では京大の今泉選手が低空侵入のために発航を中止していた。煙の中だったので苦し

かったが邪魔なやつらは来ないしとても優雅に飛べて幸先の良いスタートになった。

1 位同志社 A	6 点(竹山)
2 位阪大	1 点(満仲)
2 位名大	1 点(金井)
2 位名阪	1 点(村木)

DAY 3

朝から変な風だった。北風が強かった午前中に対し午後は背風。もしかしたらピス交があるのではないかと思ったときに僕の順番は回ってきた。上空には 4 機ほど滞空している機体があって、その内 3 機は西の土手沿いで滞空している。このまま飛んでも西には行けないと思い 3 分ルールを一杯まで使うことにした。ギリギリのところで龍谷大学の村瀬選手が奥へ伸ばしたのを見て、その隙に出発。空いたポジションに居座り周りを見るとおかしなことに気がついた。ランウェイは南風なのに北のほうは北風になっている。もしかすると…。

10分後、僕の予想は見事に当たった。北風の成

分がどんどん南下している、と同時にバリオが+2ぐらいで安定してきた。高度 500m に達すると空域オープンの無線を入れる。しかし 700m まで上昇したころになっても空域はオープン出来ない。700m まで上がったので安心したのか旋回点に向かうことにしたもののそこは沈下の海だった。高度が 550m まで落ちたときに空域オープンの無線が…。もう一度上がらないと、と思って探すもどこにもない。仕方なく着陸することになった。その後阪大チームが長時間滞空し 1 位を譲ることになってしまった。

団体

- 1 位：大阪大学 39点
- 2 位：名古屋大学 37点
- 3 位：龍谷大学 36点
- 4 位：同志社大学 A 29点
- 5 位：関西学院大学 28点

個人

- 1 位：満仲(阪大) 32点
- 2 位：竹山(同志社 A) 29点
- 3 位：浅野(関学) 28点
- 4 位：村瀬(龍谷) 27点
- 5 位：波多野(名大) 24点

最終日

条件爆発!! だが横風が強すぎてノーコンテスト! 閉会式までの空いた時間を他大学は縄跳びごっこしながら遊んでいたが同志社チームはそれどころではなかった。しかし、去年のような形ではなく実力で戦えて全国への切符を手にすることが出来たのは同志社チームの大きな成長だとも感じました。

東海・関西開会式

